

## 水上のイエス

マタイ福音書 14 章 22-33

(人々が、パンを食べて満腹した後、) イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

-----

前回 (5000 人分のパン) をうけたイントロ (導入部分) に続いて、湖の上を逆風が吹いて弟子たちの乗る船が思ったように進まない場面からきょうのテキストは展開します。そこにイエスが水の上を歩いて現れたので弟子たちは驚く、それだけではなく恐れて「幽霊」だなんていって騒いでいます。彼らは、イエスさまに見えるけれどイエスさまじゃないとおもっていたのでしょうか。そこでイエスが「わたしだ、恐れることはない」と声をかけます。ここの「わたしだ」は原語ではエゴーエイミで、神顕現表現、いうならば決めセリフで

す。歌舞伎でいえば大見得を切っているところとなります。

この湖上のイエスはマタイ福音書のほかにマルコ（6:45-52）ヨハネ（6:16-21）にも並行記事があります。マルコ・ヨハネは大見得を切ったところ（エゴーエイミ）で、この話は終わります。神が現れたのだからそれ以上いうことはない、一件落着、ということだと私は解釈しています。でもマタイ福音書はそのあと、ペトロが水の上を歩きだす、という話があります。ペトロは最初はうまく歩いているのですが「強い風」に気づいたところで沈みかける、そこで彼は「主よ、助けてください」といって、

**イエスはすぐに手を伸ばしてつかまえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拜んだ。（14:31）**

この結びを受けて「恐れと疑いから信頼へ」がきょうのテキストのテーマ（主題）と伝統的に解釈されています。恐れや疑いはあるだろうけれど、イエスに信頼すれば水の上でも歩ける、奇跡は起きる、どんな困難も大丈夫、イエスに信頼することがなにをおいても、どんな時でもあなたがたのやるべきことです、イエスさまはあなたの隣におられます、まったくそのとおりで、正論なのですが、この正論で実際に困っている時に本当になんとかなるだろうか？

**先の見えない生活を余儀なくされている人々に、あなたの手を差し伸べ、カづけてください。希望の光によって道が照らされますように。**

これはこのあとみなさんと一緒に祈る共同祈願です。よく見るとこの祈り「とりなし」になっています。実際に先の見えない生活を送らざるを得ない状況にある人は「希望の光」が見えないわけです。自分の努力でなんとかしようとはがいても、あがけばあがくほど事態は悪化していく、これは実感として多くの人を経験しているのではないのでしょうか。だからこの祈りは「とりなし」の祈りになっている、「とりなし」でないとなんとも歯の浮いた祈りになるような気がするんです。逆に言えば「とりなし」の祈りはとても大

切なのだということになります。

頭からイエスが水の上を歩いた、という話を信じている人がいます。またある人はそんなことはないだろう、波が高かった所以对岸を歩いているイエスを見て水上のイエスだと勘違いしたんだろうなんて理屈をつけたりします。どっちもどっちだとおもいますが、エマオへの道で復活のキリストから教えを受けているのに全然気づかない弟子は、イエスがパンを裂いたときに気づく、彼らの霊の眼が開いた、という話がルカ福音書（24:13-35）にあります。

わたしたちはインマヌエルのイエスということを知っています。イエスはいつもわれらと共におられます。でも普段はその姿かたちは見えません。しかし霊の眼が開くとき、開けばインマヌエル（注）を感じる、実感できるということを知っています。それは、普段ならば、恐れや疑いになるような日々の生活での出来事や、誰かにいわれたいやな一言もでも、霊の眼が開かれた状態ならば大丈夫、イエスを通してより頼む、安心できるということなのだと思えます。

注) インマヌエルは二つの言葉、インマヌ（われらとともにいる）とエル（神）を組み合わせた名前で「神はわれらとともに」の意味。

-----